

海外日系社会における盆踊りの最近の変化： ハワイの沖縄系人の選択 寺内 直子

本稿は、19世紀末から20世紀始めにかけてハワイに移住した沖縄人とその子孫によって伝承されている盆踊りの最近の変化の状況を明らかにし、その意義を考察するものである。現在、ハワイにおける日系人の割合は人口の四分の一に達し、日系人の中では沖縄系人の占める割合がもっとも高い。ハワイでは沖縄舞踊、三線教室など各種の沖縄芸能がさかんであるだけでなく、盆踊りの季節には、全曲沖縄系のレパートリーから成る盆踊りが行われている。本論では特に、沖縄系人を中心に設立された浄土真宗系の寺院・慈光園（本派本願寺派）における盆踊りを取り上げ、その様式と担い手の意識との関連を考察する。

慈光園の盆踊りはそのレパートリーと踊りの様態から、現在、沖縄本島中北部（本部町と名護市西部）で行われている手踊りを基本とする盆踊りの原形が20世紀はじめに伝わり、伝承されてきたと考えられる。しかし、1980年代になって、これに太鼓を勇壮に打ち鳴らす系統の演舞が加わった。これは、沖縄本島中部（沖縄市付近）の盆踊り（エイサー）の競技会において観光客など外部の人に見せるため、つまり、外からのエキゾティシズムに 応えるために発達した様式である。この太鼓演舞のハワイへの導入は、その主導者がすでに日本語（沖縄方言）を話さず、沖縄を知らない三世、四世であることを考えると、彼ら自身のエキゾティシズムを満足させるため、換言すれば、エキゾティシズムの内面化、と解釈することができる。さらに、1999年には、沖縄系以外のさらに多くの人々の盆踊りへの参加を促すため、沖縄系に加え日本本土系の盆踊りが加わった。結果として、慈光園の盆踊りは、より多くの人に沖縄芸能を発信するとともに、沖縄系人も本土系の演目を享受するという意味において、双方のエキゾティシズムが往還する場となり、沖縄系人だけのアイデンティティ確認の場から、異なる文化がダイナミックに交差する場へと、変容しつつある。